



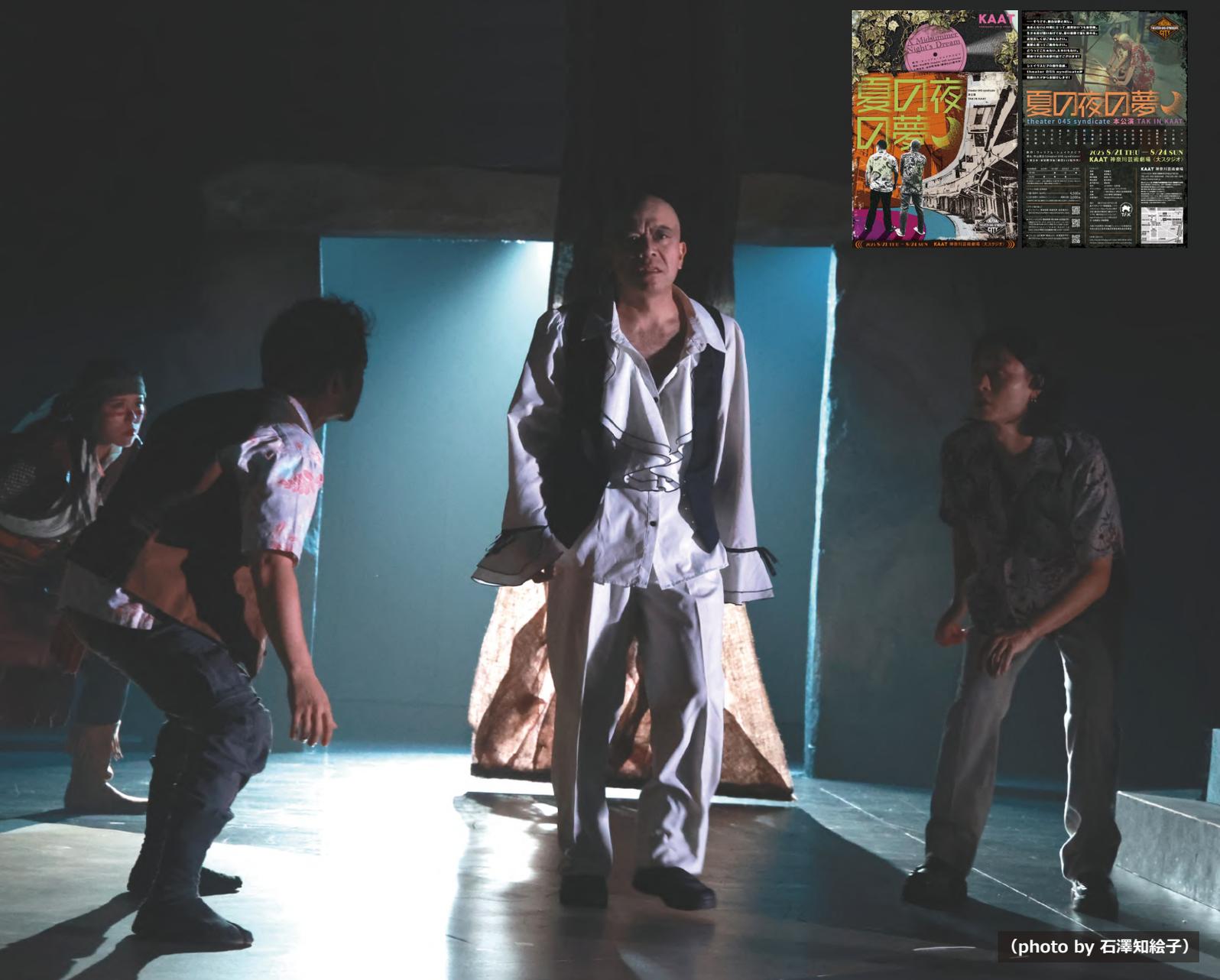
DRAMA かながわ No.96

Theater Association of Kanagawa

TAK in KAAT 「夏の夜の夢」

劇団探訪：劇団唐ゼミ☆

僕らの演劇：演劇プロデュース『螺旋階段』、劇団横濱にゆうくりあ、劇団河童座、
まりこ☆みゅーじあむ、Theater Company 夜明け、劇団820製作所
資料室だより ほか



(photo by 石澤知絵子)

TAK in KAAT

『夏の夜の夢』

2025年8月21日(木)~24日(日) KAAT 神奈川芸術劇場 大スタジオ



(photo by 石澤知絵子)

【総評】 中山朋文 (theater 045 syndicate)

私どもtheater 045 syndicateがTAK in KAATを担当するのは今回の『夏の夜の夢』が3回目となります。

「夏の夜の夢」は言わずと知れたシェイクスピアの傑作喜劇です。

はるか昔のアテネのお話し。アテネでは若い王が婚礼を控えている。そこに父から結婚を反対されている2組のカップルが訪れ、窮状を訴える。結ばれないカップルは駆け落ちを企て、森に逃げ込む。森の中では、職人たちが結婚式で披露する余興の劇を稽古している。森には妖精たちが住み、人間たちを見守り、時にいたづらをする。

そんな森の中で起こる、一夜の夢のようなお話・・・

シェイクスピア作品の中でもとりわけハッピーでポジティブなため人気も高い作品です。

ありとあらゆるかたちで上演されつくされているこの名作を今回、TAK加盟団体、劇団820製作所の波田野淳紘氏に上演台本を執筆していただきました。

波田野氏とは何度もタッグを組んできており、波田野氏によるシェイクスピア作品の上演台本化も『シンバリン』『冬物語』に続き三作目になります（『冬物語』はコロナ禍のため未上演）。

シェイクスピア作品は400年以上前にイギリスで書かれ、今も読まれ続け、上演され続けています。そこには人間の普遍的な姿が描かれているからです。波田野氏は作品のエッセンスを大切にしながら、新しい日本語でこの作品を現代にアップデートすることを念頭に上演台本を執筆しました。

キャストは横浜を中心に活動する俳優陣に加え、確かな技術とキャリアを持つ俳優たち、オーディションを勝ち抜いた俳優たちを起用しました。多様な価値観を持った俳優が集まったことで化学反応が起き、若い俳優たちは大いに刺激を受け、交流による代謝が生まれた良い座組となりました。

スタッフは常日頃から私がお世話になっている百戦錬磨のプロフェッショナルです。

今回は美術にも力を入れ、劇団青年座の根来美咲氏による舞台美術は阿部康子氏の照明も相まって、緊張感が漂いながら温かみのある空間を生み出しました。

今回は波田野氏作詞、真細暁（マナツアキ）氏作曲のオリジナル楽曲を多数使用し、主に妖精たちのシーンではミュージカル的な演出も取り入れました。昭和の歌謡ロック調の曲に、波田野氏のリリックはよくマッチし、妖しげな夜の空気を産みだすことができました。妖精たちのキャストはミュージカル経験のある俳優を起用し、とてもミステリアスでキュートなシーンになりました。

職人たちのシーンは客席から登場したり、舞台上のギャラリー部分から登場するなど、劇場を縦横無尽に使い、お客様を飽きさせない動きの多い演出を心掛けました。

この作品は、貴族たち、2組のカップル、職人たち、妖精たちの主に4つのグループの物語がからみ合いながら大きな結末に進んでいきます。貴族たちの振る舞いが起点になり、2組のカップルが物語を進めるエンジンとなり、職人たちが世界を拓き、妖精たちがその拓がった世界をすべて包み込む。

生命力のほとぼしりと森に潜む神秘が相乗効果を生んだ結果、幸せなラストシーンが産み出されました。



本作はお客様からたくさんの好評をいただき、評論家、各新聞社の記者からも賛辞をいただきました。

波田野氏は常々「演劇は祈りである」と言っています。

私はその言葉に基づいて、この作品に生きる喜びと、すべての人がその喜びを享受できるよう「祈り」を込めて演出しました。その結果できあがった景色を見て、シェイクスピア作が現代も読み継がれ、上演され続けている理由がわかりました。

シェイクスピア作品は難しいものではなく、演劇の喜びが詰まったシンプルなエンターテインメントなのです。



夏の夜の夢。シェイクスピアの名作喜劇。

この物語はとにかく登場人物が多くて話が複雑だ。4日後に婚礼を控えた公爵シーシアスとアマゾンの女王ヒポリタ。そこに現れる貴族のイジーアスとその娘ハーミア、ハーミアの恋人のライサンダーと、イジーアスが娘の婚約者と決めたディミトリアス。そこにディミトリアスに恋する元婚約者のヘレナが登場する。

ハーミアとライサンダーが駆け落ちをすべく待ち合わせた森には、ケンカ中の妖精の王オーベロンと女王のティターニア。公爵の結婚祝いに芝居を作ろうと6人の職人もまたこの森に集まる。オーベロンの策略で惚れ薬を塗られたティターニアはパックのいたずらで頭をロバにされた職人に恋に落ちてしまう。また妖精パックの勘違いで、惚れ薬を塗られたライサンダーとディミトリアスはヘレナを取り合うことに。最後はケンカを収めたオーベロンが惚れ薬の効果を解き、ハーミアとライサンダー、ヘレナとディミトリアスの2組を、シーシアスが認めて一緒に結婚を祝うことになる。

theater 045 syndicateがこの名作を上演する。ワクワクしながらKAATへ向かう。

席に着くと、舞台の木々の隙間から月が見える。始まる前からうっすらライトアップされていて象徴的。舞台が始まると大きな木が動くことで場面が変わっていく。ひな壇から階段に続く2階部分は、妖精たちの道になっており、目まぐるしく変わっていく場面が、わかりやすく区別されていた。

2人の男性に愛されるハーミアと一途にディミトリアスを追いかけるヘレナ。途中で立場は逆転し、最後は元の鞘に収まるジェットコースター並みの展開となる。4人の熱量はこの物語の肝とあっていいが、若手の俳優がみごとに演じていた。

また、いたずら好きの小さな妖精、というイメージのパックにおっさんを充てるキャスティングがそれだけで面白い。喜劇だし、これはアリだな、と思わされるくらいトリックスターとしての役割がなじんでいたと思う。

他にも、妖精の女王ティターニアと従者の3人の妖精たちは表現が時に軽快で時に妖艶で、不思議で特別な妖精の森の雰囲気を書いに醸し出していたし、全体的にテンポがよく、あちこちで笑いが差し込まれていた。海外の古典作品は現代日本人とは笑いのツボが違うので、おかしな動きで笑わせることに囚われやすく、現代風にアレンジされて作風が歪むこともあるが、今回は違和感なく作品に溶け込んでいて、特に6人の職人の芝居のパートは稽古のシーンも本番のシーンもやり取りが面白かった。

喜劇ではあるが、娘は父親の所有物、言うことを聞かないのなら死刑だといわれるような時代設定のもとに、それでも愛を貫こうとする姿、天真爛漫なパックが人間を風刺する鋭さ、力づくで欲しいものを取ろうとする王の自尊心の高さとそれとは裏腹に貴族や職人たちの思いを尊重する心の広さ、などなど、ともすると喜劇の中に埋もれてしまいがちな人としての心の在り方、時にはその愚かさなどのシェイクスピア作品の肝となる部分も、きっちり演じられていて、王道のシェイクスピアを堪能できた。

本作品ではヒポリタが最後までシーシアスに敵対し抗う姿が描かれている。他の作品では見られない(少なくとも私は見たことがない)展開だが、そこから心を許す過程が描かれ、すれ違う4組のカップルがお互いの存在の大切さを再確認する姿が描かれている。

いや、もう1組。この公演は、実はもう一つのリアルな夫婦の絆がもとになっていた。

パンフレットには、演出・中山さんがこの舞台を作ることになったきっかけが綴られていた。病気が見つかり手術を受けた直後のパートナーが、中山さんが作る夏の夜の夢が見たいと所望し、この公演をやることになったという。

当たり前なのが当たり前でなくなったとき、人はその大きさに気が付く。自分がその人に支えられ、原動力となっていたことに気が付く。ああそうか、この物語にはそんな一面も込められていたのだと、再認識できた。

どうかお大事に、今後もまた中山さんの素晴らしい作品が見られますよう。

文：倉田香菜子（劇団年輪）



■設立の経緯

1997～2005年に横浜国立大学の教授だった唐十郎のゼミナールを基に発足した劇団です。

代表の中野敦之が1999年に同大学に入学し、教授と生徒の関係をこえて私的に師事。当初は集まってきた仲間とともに授業の一環として大学内で行っていた発表を、学外での公演としても行うようになったのが劇団発足の経緯です。初めは横浜国立大学生が中心だったのですが、後に興味を持つ人なら誰でも劇団員として活動するようになりました。



唐十郎と（2010年春公演カーテンコールより）©伏見行介

■活動スタイルと主な公演地

2004年に自前の青テントを購入してからは、横浜・東京を中心に全国各地で、時には海外で唐十郎作品を上演することが活動の中心です。

劇団史としては、2005年に新国立劇場プロデュースにより行った公演をプロデビューとして捉えています。以降、横浜では、臨港パーク、帆船日本丸メモリアルパーク、関内駅近くの大通り公園石の広場での公演、東京都内では現スカイツリー建設地、池袋西口公園、浅草花やしき駐車場、新宿中央公園などでの公演を行ってきました。巡業としては、秋田、宮城、山形、新潟、石川、長野、愛知、京都、大阪などで公演を行ってきました。テントのみならず、野外での公演、劇場公演も行っています。



日本丸メモリアルパークでのテント公演（2019年秋公演より）©伏見行介

■地域とのつながり

特にテントや野外での公演では、その土地々々の方々に受け入れていただくための交流に力を入れてきました。突然に劇場が現れ、皆さんが生活や仕事をしている場の景色を変えるわけですから、事前のあいさつ回りや許可申請を丁寧に行っていきます。結果的に、それが特別な広報協力や町ぐるみの支援に結びつくことが多くあり、一度でも公演させていただいた土地の皆様とのご縁を、ずっと大切にしています。



臨港パークでの野外公演（2015年秋公演より）©伏見行介

■代表作、過去に実施した企画

代表作

- ・オカマ100人芝居『下谷万年町物語』（2009～2010年）浅草花やしき
- ・『ジョン・シルバー三部作』（2019年）日本丸メモリアルパーク
- ・『唐版 風の又三郎』（2020～2021年）新宿中央公園
- ・『少女仮面』（2024～2025年）恵比寿・エコー劇場
- ・唐十郎書き下ろし作品『木馬の鼻』（2012～2014年）横浜・東京・長野・名古屋・大阪

他にも、唐十郎作品以外に美術家・やなぎみわや映画監督・望月六郎との協働による新作公演、唐十郎リサイタルなど4部構成からなる「大唐十郎展」などのイベントも手掛けてきました。近年では特に、難解とされる唐十郎作品を分かりやすく読みこなし、舞台化するノウハウを普及する活動にも注力しています。



唐十郎書き下ろし作品『木馬の鼻』（2012年春公演より）©伏見行介

■近年注力しているワークショップ

毎週オンラインでのワークショップを開催する等、定期的に対面でのワークショップを行い、若者からシニアまで唐十郎作品に興味を持つ方にご参加いただいています。

■拠点

2018年まで横浜国立大学を拠点としてきましたが、2019年以降は横浜市鶴見区の倉庫HandiLabo（ハンディラボ）を拠点に活動しています。

■今後の目標

唐十郎の代表作である『少女仮面』の唐ゼミ☆版上演を劇団レパートリーとして、各地で上演すること。そして2026年秋には、劇団として未上演の傑作・大作である『ベンガルの虎』テント公演を成功させることが目標です。

公演やワークショップを通じて、唐十郎作品への理解を次世代による上演に向けて刷新していくことも、大きな目標です。近年は劇団員数が減っている（2025年現在6名）、一緒に汗をかき、表現に取り組むメンバーを増やしたいと切望しています



JR関内駅近く 大通り公園にてテント客席と屋外ステージを用いた『鐵假面（てつかめん）』（2024年春公演より）©伏見行介



僕らの演劇



演劇プロデュース『螺旋階段』『妄想コピー/river』
2025年10月24日(金)～26日(日) 国府津海岸BLEND PARK

劇団横濱にゆうくりあ「ヨコハマの街に永遠が流れている」
2025年11月15日(土)～16日(日) STスポット横浜



「river」は、ベテラン弁護士と見習い弁護士の事務所に訪れた女の、「子供を殺した」罪の告白が展開する。彼女は両親から受けたトラウマがぬぐい切れず、子供を愛せなかったという。しかし、こどもを川岸においてきてしまったことは故意ではないという。そうして結果子どもを殺してしまったと告白するのだ。彼女の幼少からの生い立ちや環境が語られる。おとなになって母親から解放された彼女が結婚して幸せになった時間もつかの間、子どもが出来てからは、その幸せな時間も変わってしまったと語り続ける。そして彼女が自分の不幸せをぼうっと考えていて子供の存在を忘れたときに子どもが川に落ちて亡くなるという事故が起きる。この本の作者の描く母子像がいつも、つまされる想い！自分と母親。母親になってからの子どもとの関係や心情。観劇しながら共感したり、自分の感情を確かめたりもする。とてもシリアスな母親の告白の中、様々な状況をコミカルに、度を越えてふざけた表現で見せるところも凄い！

そして最後に、弁護士事務所かと思っていたところが三途の川を渡らせるかどうかの吟味場所？のようだったのには、うなってしまった（解釈が間違っていたらごめんなさい）。人は誰でも告白したい罪を抱えていると思う。告白することで懺悔になるのか、とも思うが、罪を告白することの重みや人の心の葛藤、軌跡を十分感じた芝居だった。

「妄想コピー」は、天才的な小説家である兄弟が、自分が主人公である小説に書き換えると無茶を言うヤクザな男に翻弄される会話劇。これも、倉庫と言う会場のシンプルな舞台セットが生きている。二人で様々なアイデアを出し合う。主人公をカッコいい刑事に、いい人に、果ては世界を宇宙をも救う宇宙人に！二人のアイデアはどんどん広がっていくが、ヤクザな男は気に入らない。ヤクザな男が納得できるまで、其処から出られないという閉塞感も、この会場の空間に生きていたと思う。創作の苦悩は人知れず、でもとても共感できる。アイデアが膨らみ、妄想し、狂気な展開になっても、ユーモアや滑稽さが散りばめられている。演者のバランスが良く、3人の会話のテンポも良い。チラシにあった「締め付けられる創造の苦しみ、その中で光る狂気とユーモアの対比を楽しんで頂けたら」とあったが、これまたラストまで何が起きるか分からない期待通り、楽しませていただいた。

どちらも再演作品とのこと。しかし、色あせない。どちらも演者が魅力的！どちらもふざけているのに感動する。会場の外は直ぐ近くに海岸があり、始終、波の音が聞こえていた。そのドーンと静かに寄せる波の音が全く邪魔ではなく、かえって心地よいリズムが身体によせる。この会場を使ったのも良かった！

チラシにあった「あなた自身の輪郭」という演出家の言葉がとても響いた。彼が描く芝居の世界観は一言では表現できない魅力がいっぱい。彼の生きてきた環境や軌跡が垣間見える気もする。作家としてとても貴重だと思う。今後も楽しみである。

文：川井眞理子（まりこ☆みゆーじあむ）

劇団横濱にゆうくりあは「いつまでも青春！どこまでも熱風！」を掲げ、これまでに演劇66本、映画4本を制作してきた。2025年からは新代表・坂下優一さんのもと、新人2名（Junoさん、みきていーさん）が加入し、新体制は順調な滑り出しを見せている。

「逢いたくて逢いたくて。あの頃のあなたに逢いたくて、あの頃の自分に逢いたくてー」

横浜と神戸、二つの港町を背景に、男女の恋慕を描く本作は、詩集をめくるようなリリズムに包まれて幕を開ける。物語の中心は、サチコ（櫻井マリアさん）と富雄（海を見ていたジョニーさん）。神戸・長田から横浜へ流れ着いた二人は、1995年の阪神・淡路大震災によって運命を断たれ、サチコは生と死の隔たりを抱えながら富雄を想い続ける。冒頭から交わされる情感豊かなやりとりは昭和の青春ドラマを思わせ、にゆうくりあ特有の濃密な芝居が約90分の舞台を貫いていた。

舞台では詩的なセリフ、歌、情熱的な演技が渾然と溶け合い、年齢を重ねた俳優たちが「いつまでも青春」を身体で示す。のど自慢の公開収録シーンを起点に多くの歌が挿入され、ラストの「見上げてごらん夜の星を」へと収束する構成は、レビューショーのような華やかさを帯びる。客演・勝碇若子さんの歌声には「生涯俳優」の矜持が宿り、昭和歌謡の旋律が世代を超えて劇場に響いていた。

会場となったSTスポットは約56㎡・60席のホワイトボックス空間。時間や場所を軽やかに横断する本作との相性が良く、異文化が交わる港町・横浜の空気を自然に呼び込んでいた。楽屋からの出はけを花道のように活用し、正面2箇所出入口と合わせた複数の動線から登場人物が次々と現れる演出も巧みである。いづみやひとみさんが操る“坊やの人形”とサチコのやりとりは内面世界を描き、装置を排した舞台に独特の幻想性を与えていた。

脇を固めるKiccoさん、斉藤れいこさん、吉浜直樹さんの存在感も印象に残る。ユーモラスな掛け合いで観客を巻き込み、正面を向いて声を張り上げる芝居は、観る人によって“熱量”とも“過剰”とも映るだろう。だが、本作が掲げる「青春は若者だけのものではない」という姿勢が、その表現に確かな説得力を与えていた。生の肯定と「生き抜くこと」への切実さ。その二つが背中合わせに存在することで、作品全体に奥行きが生まれている。

俳優陣の堂々たる佇まいは、観る者に「自分も前を向いて生きていこう」と思わせる力を持つ。精神の奥底に宿る青春の熱は、時間を超えて輝き続ける。劇団のもつ“青春の季節に踏みとどまる”気配が、作品の主題「永遠」と響き合い、「いつまでも青春！どこまでも熱風！」という理念を鮮やかに体現していた。

青春と熱風は、たしかにここにあった。

文：こんのかつゆき（劇団コピュラ）



劇団河童座「これでいいのか!! vol.2」

2025年12月6日(土)~7日(日) 横須賀市立青少年会館3Fホール



今回が第243回目の公演となる老舗劇団による本作は、昨年上演された『これでいいのか!!』の続編にあたるコメディ作品であり、三話構成のオムニバス形式で現代社会が抱えるさまざまな問題を軽やかに、しかし鋭く描き出している。劇団員は老若男女が揃い、いずれもこの劇団を支えてきたオリジナルメンバーで構成されている。その舞台上の佇まいからは、地域に根ざし、演劇を積み重ねてきた時間の厚みが自然と感じられた。

第壹話「学級崩壊」では、ハラスメントをテーマに、新米教師の発言をきっかけとして教室が混乱していく様子が描かれる。言葉が発すること自体がリスクとなり得る現代の空気感が、誇張されたコメディとして表現される一方で、その笑いの奥には決して他人事では済まされない現実が透けて見える。正しさが必ずしも安心につながる社会の息苦しさが、観客の笑いとともにより共有されていく。

第貳話「家庭崩壊」では、働き方改革を軸に物語が展開される。残業がなくなり、家庭で過ごす時間が増えた父親が、逆に家庭内での居場所を失っていくという皮肉な構図が印象的だ。制度としては理想的に見える改革が、個々の生活においては必ずしも幸福をもたらすとは限らない。そのズレが、ユーモアを交えながら描かれていく。

第参話「地球崩壊」では、教師という立場を失い、さらに家庭崩壊によって行き場をなくした主人公が登場する。タイトルから想起されるような壮大なテーマが前面に押し出されるというよりも、社会の中で居場所を見失った一人の人間の行き着く先が描かれ、前二話で提示された問題が別の角度から重ねられていく構成となっている。人里離れた場所での出会いは、現実離れた可笑しさと同時に、寓話的な余韻を残した。

当日パンフレットには「賛否両論あるかもしれませんが、笑い飛ばしてご覧ください」との一文が添えられていた。しかし実際には、単なる笑い話として消費されるには惜しいほど、現代社会における制度や価値観の歪みが丁寧に盛り込まれていたように感じる。声高に批判するのではなく、あくまでコメディとして差し出すことで、観客それぞれが「これでいいのか?」と自分自身に問い返す余白が生まれていたと感じました。

老舗劇団でありながら、時代の変化や社会の違和感から目を背けることなく舞台に取り込み続けている姿勢には、確かな矜持を感じました。また、老若男女揃った役者陣の演技が、作品全体に安心感と説得力を与えていました。

笑って観られる。しかし、笑ったあとに少し考えてしまう。『これでいいのか!! vol.2』は、そんな余韻を観客に残す作品でした。今の社会を生きる私たちにとって、この問いは決して遠いものではなく感じました。そのことを、穏やかな笑いとともにより静かに突きつけてくる舞台でした。

文：福本ぼう之介（プラスチックな月）

まりこ☆みゅーじあむ「おはなしころころ」vol.21

2025年12月12日(金) かふえ&ほーるwith遊

小さなカフェの奥にあるグランドピアノが置かれた部屋が、お招きされた空間だ。演目がかかれたリーフレットにさっと目を通す。昨今の世界情勢を鑑みると、心温まる話が聞きたくなるのは私だけでなく、30席ほどの空間は満席となった。

衣装がいい。話の導入にうってつけである。天使を連想させる白の柔らかな素材の衣装はヘンにクリスマスっぽくなくてよいかも。読み手の存在を消してくれて話に集中できる。まあ、劇評を書かなくてはならないから、ヘンに細かいところまで見てしまい、聴く方に100%集中できないのは辛いが・・・。

作品は欧州、米国、日本から5作品が選ばれ、どの作品も三人の読み手で話が展開していく。流石に三人とも芝居経験が豊富なだけあって、喜怒哀楽、諸々の声で物語を盛り上げるのはお手のものだ。若干、朗読演劇にもみえてしまうが、まあ、それは好みの問題で、私はこの朗読演劇が好きだ。

『デューク』江國香織作「つめたいよるに」所収：私も犬を飼っていた一人として、このペットロスから立ち直るのには時間がかかった。明け方、息を引き取る瞬間、ほんの数秒だと思うのだが、私は寝てしまったのだ。私の腕の中で息を引き取った息子（愛犬）にはまだ温もりがあり、想い出す度に泣いた。少年がプールで魚のように泳ぐシーンで、緩やかなピアノの音が入り、絶妙な効果音となっている。ゆっくりとひとかきひとけりすると波紋ができた、それを連想できるのである。場面転換にも一役かってくれて、もう一人の読み手に感謝である。

『クリスマスの鐘』アメリカ民話：王様、兄弟の兄・弟、町の衆、等々、読み手の声の特徴を十分に活かしている。カラーン、コローンと口でいうのも良いが、本当に鐘の音があったら臨場感アップだったかも。風っぽく、前か後ろにピアノの音を入れるとか。下駄っぽく思ったのは私だけ・・・?

『三つの願い』日本民話：日本民話によくある話で、“欲張りはいけませんよ。幸せになれませんよ”の教訓である。導入も芝居っぽく面白いので、台本から目を離してやって欲しかったなあ・・・ですね。すみません、これまた私の好みです。

『ランプの魔人と3人の願い』：読み手三人の表情がイイし、三姉妹の特徴を出している。芝居にもってこい!のストーリーであり楽しめた。私事だが、以前これに似たラジオドラマをやったことがある。舞台は雪山であり、魔人でなく龍神が出てくる。雪山を歩く息づかい、吹雪、雪崩、龍神の表現に悩んだことを想い出してしまった。

『世界で一番の贈り物』：この作品をこの時期に読みたかったに違いないと思った。「現代の二大対戦」と言われているロシアによるウクライナへの侵攻、イスラエル対パレスチナ紛争、内戦を含めれば世界各地で争いが起きているのが悲しい。子供の頃聞いた教訓話は無駄だったと思って欲しくない。私にとって「お天道様が見ている」は未だ怖いフレーズなのだ。

文：Kicco（劇団横濱にゆうくりあ）



Theater Company 夜明け「Eve II」
2025年12月25日(木)～27日(土) 大倉山記念館ホール



前年12月に行った前夜祭での公演は、今回の演目と全く同じものだった。その2024年舞台については、大狼羊さん（2024年当時音響を担当し今年の舞台では赤鼻トナカイのルドルフの役を透明感のある演技で見事に演じた）が劇評を書いている。劇のあらすじなどの確に良く書かれているし、ネット（DRAMAかながわ94号）でも読めるので是非合わせてご一読をお勧めしたい。

私も去年の公演を観に行き素晴らしい舞台で感動したのが、今回の観劇にあたり内容が分かっているので退屈してしまうのではないかとの懸念があった。しかしそれは杞憂に過ぎず、鑑賞し終えて胸いっぱい感動している自分がそこにいた。あらすじがわかっているのに何故もう一度感動するのか。それはこの劇団が前年作り出した素晴らしい舞台の記憶を大切にしながらもあえて甘えてそれをなぞらず、一旦解体し再構築ししっかり努力して新しく作り上げたからではないだろうか。去年の良い舞台に再び出会えたなつかしさの喜びと、新鮮で新しい良い舞台を魅せてくれた驚きが一体となり、また違う感動に満たされたのではないかと思える。

そしてもう一つ、この公演の空間を生かした舞台の設計と、ピアノ生演奏を利用した音楽の使い方の素晴らしさもお伝えしたい。会場となった大倉山記念館は、1932年に建てられたクレタ・ミケーネ様式のギリシャ神殿風の西洋的なものと木組みを生かした東洋的なものがまじった美しいホールである。天井は高く音楽の演奏会場向きではあるが、照明を吊るバトンがまったくないため演劇には不向きな場所である。その悪条件を逆手に取り、ステージサイドスポットを使うことで通常ならばバトンを吊ることができないため生じる影を逆にうまく利用し、歴史ある壮麗な建物を光と闇のコントラストで見事に照らし出していた。それが今回の時代設定である20世紀前半の情景に見事にマッチし、どんな演劇会場でつくるセットよりも素晴らしい立体的な空間を生み出していた。

劇中の音源は音楽ホールに置かれたグランドピアノによる生演奏で、録音物の再生と比べて音が立体的になり、あたかも演者とおなじように演技をしているようであった。同じLIVEだからであろう。そのピアノの生演奏と出演者の方々の素敵な歌声が響きあい、良質のクリスマス演奏会とも言える、音楽と一体感のある素晴らしい舞台になっていた。

この舞台が終わった後にカンパニーの主宰：木之枝棒太郎さんから来年4月の舞台に向けたオーディションの告知があった。今回の素晴らしい舞台を観た若い観客が多数応募するのではないだろうか。そして今年の旗揚げ公演を観に行ったときに初めて舞台に立った役者さんが今回の舞台に出演したように、来年の舞台にまた新しい役者さんが活躍することが楽しみだ。

来年もまた、なつかしくそして新しい驚きのある舞台を必ず観に行こうと決めたのだった。皆さんもぜひこの舞台を一度味わっていただきたい。できれば大切な人と一緒に・・・。

文：野比隆彦

劇団820製作所「みんな元気かな」
2025年12月30日(火) 若葉町ウォーフ

20分ほどのショートを新旧6作品！おおよそ、2時間の上演と聞いたが全く時間を感じなかった。20分という長さの中に、ぎゅっと詰め込まれた内容。その短い時間に、始まり方から終わり方まで聴きなれたはずの言葉が、不思議な世界観に誘導する。特別な言葉ではないはず。私たちが話したり聞いたりしている当たり前の聴きなれた言葉だ。それが、書き手・演出によって、また其れを演じる役者によって聴きなれた当たり前の言葉ではなくなる。その言葉一つ一つがとても重要な意味を持つので、20分と言う短い芝居なのに、私の頭の中と心は一杯になってしまった。もう一言で言うと「降参」だ。こんなに刺激的な芝居は久しぶりだった。

私が、覚えていて此处で書ける言葉「わからないことばかり」「生きていて楽しい?」「何がしたいの?」「みんなやってる。みんな言ってる」「無いものを探す」「内側にけむりのように」「世界に亀裂」「世界を救いましょう」「世界をほろぼしなさい」「響応の定理」「とりかえしのつかないせかい」ほか。そして個人的に響いてきたのは、おそらく、詩人ポール・エリュアールの詩（勘違いでしたら申し訳ありません）。

舞台は特別なセットは無い。椅子が2つ。或いは数個。照明と音響のアクセントのみ。なので役者から放出されるセリフと芝居が本当に大事だと思うが、見事だった！

最近の作品も有れば2010年、2014年作品もある。きっと、その当時と今回はやる側も見る側も事情が違うと思う。しかし、新旧6作品もあるのに約2時間をそのまま受け入れて観ることが出来たのには、この6作品に感じる共通のものがあるからと思えた。破壊と再生。そして詩のような舞台。そんなものを感じた。

作家もチラシに記載していた「新旧おりませた短編集ですが、並べてみるとどこかに暴力の気配が通底しています。演劇はそれらを脱臼する装置にも、免疫を付与する毒にもなり得ます。外なる／内なる暴力の巧妙さにしてやられる前に、わずかなりともその関節を外してやろうぜ」これこそ、今回の舞台の真髓！私たちが、当たり前のことに慣らされて、気が付かぬうちに真実もみえなくなってしまうたら。私の絵を描く時のテーマは「みえなくとも其処に在る。～のありか」だ。もっと目を開けてそこかしこを観たいと思った。

抽象的な劇評になってしまったが、芝居は抜群なセンスの笑いもあり、シュールで予想もつかない意外な展開がSF的でもあり、様々な要素で最後までふざけた力と愛のある素晴らしい芝居だった。額に血が流れていても、手に食パンを持っていたても、作家・演出の愛さえ感じた。キャッチフレーズ通り、「人」が描かれている。

6作品の中で一番のお気に入り「みんな元気でね」。どの作品も好きだが、二番目に好きなのは「少女はどこで煙草を学ぶか」である。

文：川井眞理子（まりこ☆みゅーじあむ）



演劇資料室からオススメの一冊

「娘に語る祖国」（つかこうへい著／光文社）

つかこうへいは本名を金原峰雄（かねはらみねお）といい、韓国名が金峰雄（キム・ボンウン）、在日韓国人の二世である。生まれは福岡、本人によれば通説的に飯塚市としているが、実際は少し違うらしい。嘉穂郡嘉穂町牛隈（かほぐん かほまち うしくま）という聞いたこともないところだ。牛と熊ばかりいるとんでもない田舎みたいで恥ずかしかったから、と説明している。本人曰く、とにかく見栄っ張りなのだそう。この辺りは筑豊炭田の真ん中、当時の半島出身者差別はすさまじかったらしい。そうした生い立ちとの葛藤もあったのか、男気は並みの日本人以上だと本人は自負している。なので巷間よく言われる“つかこうへい”のペンネームは、いつか公平を夢見て、それを仮名にしたものと言われるが、本人曰く実はソウルに残してきた祖母のためだという。祖母は平仮名しか読めなかったのだ。演出では我を通し、本番中でも役者の思惑などお構いなしに平気で台詞を変えちゃうという“つか”だが、おばあちゃんには優しくかった。

屈折した青春時代を経て、本人の弁によればどんどん立派な人間になっていった。呼応するように岸田國士戯曲賞を取り、直木賞作家として功成り名を遂げる。そうして立派なパパとなって愛娘のみな子に語りかけるのである。娘は、二度目の結婚相手である元つか劇団の女優、生駒直子との間にもうけた一粒種である。夫婦別姓として娘には峰雄（みねお）と直子（なおこ）から1文字ずつ取って「みな子」とした。出生届を出すにあたって、妻の戸籍で生駒みな子としたのには、妻子より先立つことを予見したのか。その一方で妻の姓で出生届を提出した時、韓国に残してきたおばあちゃんに会わず顔がなかったと語っている。その夜、祖国のおばあちゃん、そして自分に生を与えてくれた祖国に対する申し訳ない気持ちを噛み締めつつぼろぼろ涙にぐれながら飲み明

かしたという。これは、つか一流の芝居っ気ではなく、本音なのだろうと信じたい。ここに在日二世であり演劇人、作家として頂を極めた一人の男の内面が垣間見える。

娘が生まれて2年後に「熱海殺人事件」を引っ提げて韓国での公演に乗り込んだ際の顛末が語られている。ここで、つかを支えて重要な役割りを果たすのが、「つかこうへい正伝」を著した演出家の長谷川康夫であり、制作会社を率いる菅野重郎である。ともにつかの演劇人としての足跡を語るときに欠かせない。この二人なしでは、韓国公演の成功はなかったろう。ところが、つかは彼らに感謝の言葉を贈るところか、ケチョンケチョンなのである。しかし、つかが決して傲慢なのではなく、そもそもそれが彼のスタイルであるし、もしかしたら照れ隠しなのかもしれない。とはいえ、国籍や自らのルーツをどう捉えるのか、という点では多くの葛藤があったのだろう。このことを「パパには、つかこうへいという立場がある」のだと娘に語りかけている。

さてこうしてさまざまな事件やハプニング、葛藤のオンパレードの果てに、なんとKCIA(大韓民国中央情報部)まで登場する。公演を目指して稽古を重ねる過程で並々ならぬ葛藤があり、途中で台本の大幅な書き直しをせざるを得ない状況に追い込まれる。それらの事態を娘への語り口を借りて、「パパはね・・・」と娘に語りかけるように綴っていく。物語の終章で、日本への帰路となる機内での菅野との会話に続く、つかの独白をご紹介します。

みな子よ、きっと祖国とは、おまえの美しさのことです。

ママの二心のないやさしさのことです。

パパがママを愛しく思う、その熱さの中に国はあるのです。

二人がおまえをかけがえなく思うまなざしの中に、祖国はあるのです。

そして、男と女がいとおしく思い合う意志の強さがあれば、国は滅びるものではありません。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）

演劇資料室

【開室時間】

平日（火曜～金曜） 13:00～22:00（貸出は21:30まで）

土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）

【休室日】

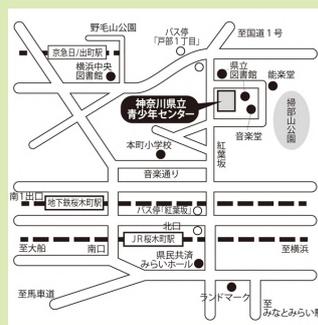
月曜、年末年始

※上記以外にも休室日がございます。

ホームページをご確認の上、お越しく下さい。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 電話：045-286-4485



神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

- 演劇プロデュース『螺旋階段』 ■ケル・ペッパー ■京浜協同劇団 ■劇団河童座 ■劇団唐ゼミ☆ ■劇団コピュラ
- 劇団年輪 ■劇団820製作所 ■劇団まきじゃく ■劇団「無題」 ■劇団横濱にゆうくりあ ■虚空環幻想レーゲンハイト
- Theater Company 夜明け ■theater 045 syndicate ■ドリル饅頭 ■プラスチックな月 ■まりこ☆みゅーじあむ
- MPiNK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川) ■横浜小劇場(横浜演劇研究所附属) ■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 96号

[発行] 一般社団法人 神奈川県演劇連盟（2026年1月31日）

[編集] オッスタかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゆうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、
緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、波田野淳紘（劇団820製作所）、
中山朋文（theater 045 syndicate）、宮田信宏（劇団年輪）、こんのかつゆき（劇団コピュラ）

[ホームページ] <https://kenenren.or.jp/>

